

氏名(本籍)	李 ^り 慶 ^{きよん} 實 ^{しる} (韓国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第2578号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語可能表現の諸相

主査	筑波大学教授	博士(言語学)	矢澤真人
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	大倉浩
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	杉本武
副査	筑波大学准教授		橋本修
副査			田中章夫

論文の内容の要旨

本論文は、近・現代日本語の可能表現について、形式・格・意味・肯(可能)/否(不可能)といった様々な側面から調査・分析し、考察したものである。近代から現代の日本語における可能表現の推移のほか、可能表現についての文法学的概念規定や可能文の意志性と状態性の分析、さらには、日・韓両言語の可能表現に関する対照研究も含む、近・現代日本語可能表現の総合的な研究である。

本論文は、10章からなる。序章で、本論文の目的と研究方法の紹介、論文の構成について述べたあと、第1章において、助動詞「レル・ラレル」の可能の意味と自発・受動・尊敬の意味との混同の実態を調査し、「助動詞レル・ラレル」から<可能>が切り離されることの意味および言語史的な位置付けについて検討を加え、助動詞「レル・ラレル」から<可能>が切り離されるのはごく自然で、理にかなったものであることを示す。あわせて可能動詞が登場することによるデメリットについても検討を加え、可能動詞を用いることによって生じるメリット(機能分担・システムが整えられる)の方が、デメリットより大きいことから、「可能動詞」の道が開かれたと推定する。

第2章では、明治以降の文学作品の中に現れる可能表現形式について調査・分析し、全体として、可能動詞の出現率が高くなり、可能の助動詞「レル・ラレル」・「コトガデキル」の出現率は下がっていることを明らかにする。文体による各可能表現形式の出現率からは、可能動詞は会話文での出現率が高く、「コトガデキル」は非会話文での出現率が高いこと、全体・会話文・非会話文のそれぞれを動詞の活用型別に分けて時代別に各可能表現形式の変化を調べると、五段動詞における可能動詞の増加、一段・カ変動詞における「ラ抜き言葉」の出現、サ変動詞における「可能のデキル」の増加といった現象が確認できることを示し、これらが可能専用の動詞型表現形の勢力拡大と解釈できることを示す。

第3章では、第2章に引き続き、構文的な側面に焦点を当てる。明治以降の文学作品の中で他動詞を用いた可能動詞文、可能の助動詞文、「可能のデキル」文に注目し、他動詞の対象物が「ヲ格」「ガ格」「無格」「ソノ他」のどの形で出現するか、対象の格表示の動向を調査する。「ヲ格」が時代とともに出現率が高くなっていること、とりわけ可能の助動詞における伸長率が高いことを明らかにし、これが形態的な変化に伴う構

文的な変化であると解釈する。

第4章・第5章では、意味的な側面に焦点を当てる。第4章では、明治以降の文学作品の中に現れた可能動詞・可能の助動詞・「コトガデキル」が「能力可能」「状況可能」「許容可能」のどの意味を表すかについて調査し、いずれの形式も、時代とともに、「許容可能」の出現率が高くなっていること、特に「コトガデキル」は「能力可能」の出現率が高く、「可能の助動詞」は「状況可能」の出現率が高いことを示す。続く第5章では、明治以降の文学作品の中に現れた可能動詞・可能の助動詞・「コトガデキル」における「不可能」（否定形）と「可能」（肯定形）の動向を調査し、いずれの可能表現形式も、時代とともに「否定」の出現率が低くなり、「肯定」の出現率は上がっていること、特に「否定」の出現率は「可能の助動詞」>「可能動詞」>「コトガデキル」の順になること、「肯定」の出現率は「コトガデキル」>「可能動詞」>「可能の助動詞」の順になることを示す。

第6章では、以上の考察を受けて、日本語可能表現の意味・用法および概念規定について、改めて検討を加える。「可能の助動詞・可能動詞」「デキル」「得ル」について形式の意味・用法について検討し、それぞれのタイプは、一方では可能という意味領域で相互共存の関係にあるものの、もう一方では個々独特の意味・用法と文体的な違いを持ちながら相互補完的な関係にあることを明らかにする。

第7章では、日本語可能表現の特徴である「可能主体の意志性」と「状態性」について、「可能の助動詞・可能動詞」文、「デキル」文、「得ル」文の「可能主体の意志性」と「状態性」について調査し、「可能主体の意志性」については、「可能の助動詞・可能動詞」<「デキル」<「得ル」の順で意志性の低い動詞と共起することを示す。一方、「状態性」については、「可能の助動詞・可能動詞」「デキル」「得ル」は、可能な状態はもちろん、それが実現した状態、または実現した状態の持続を表すことを明らかにする。

第8章では、日・韓の小説と翻訳テキストを取り上げ、両言語の可能表現形式に対する対応のあり方および、そこから生ずる意味ニュアンスの違いについて検討し、両言語とも可能表現形式に対し単独動詞が対応する場合があること、他動詞の可能表現形式に対し自動詞的な表現が対応する場合があることを示す。さらに、「～状態から～状態になる」といった<状態変化>の意味ニュアンスを持つ日本語他動詞の可能表現形式には韓国語の「V-doe-」・「V-ji-」が対応すること、「おのずからそうなる」といった<自発>の意味ニュアンスを持つ日本語自動詞の可能表現に対しては韓国語他動詞の可能表現形式が対応することを示す。

終章では、各章の内容を総括するとともに、残された課題と今後の展望について触れる。

審査の結果の要旨

本論文は、近・現代の日本語における可能表現の推移を、綿密な調査と的確な分析で考察し、多面的に可能表現の特徴を明らかにした点に価値がある。

日本語の可能表現については、「レル・ラレル」の意味の消長や可能動詞の成立、他動詞可能文における「ヲ／ガ」の格表示、能力可能・状況可能・許容可能の別など、個々の話題に関してはかなりの研究も行われ、成果も上がっているが、それぞれがどのように関連し合っているのかについては、十分な考察が行き届いているとは言いがたかった。

本論文は、近・現代日本語の可能表現を、可能動詞によるもの、可能の助動詞「レル・ラレル」によるもの、「コトガデキル」によるものなどの形式ごとに、対象の「ガ／ヲ」の格表示や、能力可能／状況可能／許容可能、可能主体の意志性と状態性など、様々な側面から調査・分析を行い、現代日本語の可能表現を全体的にどう位置付けるか、多面的に考察を行っている。

特に、第2章から第5章にかけて、時代の単純な数の増減を比較するのではなく、「期待偏差値」の概念を活用した統計学的な手法で時代や形式ごとの比較を試みている。時代の推移に従って、可能動詞やサ変の

「可能のデキル」を用いた可能表現がマイナス方向からプラス方向に移行するのに対し、可能の助動詞や「コトガデキル」を用いた可能表現は逆にプラス方向からマイナス方向に移行することを示すとともに、格表示の面でも、時代とともにヲ格がプラス方向に移行すること、可能動詞においては時代とともに能力可能がプラス方向からマイナス方向に移行し、状況可能がマイナス方向からプラス方向に移行することなどを示し、「ら抜きことば」を含む可能動詞への移行が、可能の助動詞への言い換えではなく、意味・構文的な変化と結びついていることを明らかにしている。このような手法による研究は、日本語の数量的な研究の学会誌『計量日本語学』においても注目されることとなっている。

さらに、日本語の可能表現には、可能主体の意志性の強さと可能表現の形式に関連があること、可能表現は可能な状態のほか、可能な状態が実現した状態や実現した状態の持続等も表す状態表現であることなどを示し、これらを韓国語の可能表現と比較する。ここでも可能の助動詞や可能動詞、「V-doe-」・「V-ji-」など可能専用形式だけを対比するのではなく、それぞれ、可能を表す形式を伴わない動詞そのものの表現も含めた総合的な観点から対比を行い、「～状態から～状態になる」といった<状態変化>の意味ニュアンスを持つ日本語他動詞の可能表現形式には韓国語の「V-doe-」・「V-ji-」が対応し、「おのずからそうなる」といった<自発>の意味ニュアンスを持つ日本語自動詞の可能表現に対しては韓国語他動詞の可能表現形式が対応するという結論を導いており、日韓対照の観点からも注目される。

一方、多面的な考察は行われているが、総合性という点ではまだ行き届かない点も見受けられる。先に示した可能動詞化についても、それぞれの関連は示唆されるが、全体がどのように捉えられるものかについては、資料的な限界もあり、今後さらに検討する必要がある。ただ、これについては、本論文が明らかにしたところからさらに導かれるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

平成24年1月17日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、所定の学力確認を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。